

エディトリアル

市立恵那病院 管理者 山田誠史

一口に『がん検診』と言っても、職場で実施するもの、市町村が主体となるもの、法的義務のない任意の人間ドックなど、実施主体、内容などさまざまである。地域医療の現場では、日常診療の中で患者にがん検診の受診勧奨を行ったり、施設として受託しているがん検診事業を実施するほか、市町村などから助言や指導を求められることも多い。しかし、がん検診の有効性や精度、過剰診断に伴う不利益などの問題点について十分理解されていないことも多いと思われる。

そこで本特集では、対策型検診の対象となる5つのがんに加えて、日常診療でも身近なPSAによる前立腺がん検診をテーマとし、地域医療の現場で有効ながん検診を実践するために必要な考え方と最近のエビデンスについて解説をしていただいた。

祖父江友孝氏にはがん検診総論を記述していただいた。臨床医はともすれば検診については受診勧奨に偏りがちだが、検診による不利益やバイアスなど十分考慮すべきであることを改めて理解できた。中山富雄氏には肺がん検診について記述していただいた。肺がん検診についてはこれまでもその有効性に対して議論があるところではあったが、低線量CT検診も含めてエビデンスをご紹介いただいた。斎藤博氏には大腸がん検診について記述していただいた。便潜血検査の大腸がん死亡減少効果については明らかであるが、今後内視鏡検診に関するエビデンスが増えてくることも期待したい。濱島ちさと氏には胃がん検診について記述していただいた。日本ではいまだX線による検診が主流であり、全国市町村の約半数が内視鏡検診を導入していないとのこと。実際私の勤務地でも今年度に始まったばかりであり、有効性の検討にはまだ時間がかかると思われた。森定徹氏、青木大輔氏には子宮頸がん検診について記述していただいた。HPV検査を用いた検診について詳しく述べられており、病変ではなく感染を検出する検査の検診への応用についての難しさを実感した。鈴木昭彦氏には乳がん検診について記述していただいた。乳がんは日本人女性で最も多く、またピンクリボン運動をはじめとして啓発活動も広く行われおり、一般住民にとってもなじみのある検診であろう。本論文では若年者での精度が落ちるといわれるマンモグラフィへの対策としての超音波検診についても述べられている。大島明氏には前立腺がん検診について記述していただいた。PSA検査による前立腺がん検診は指針に定められていないものの約8割の市町村で行われているが、過剰診断による不利益を十分考慮すべきと考えられた。

本特集により、スクリーニングについての基本的な理解が深まり、日常診療を含め地域医療活動の中で、不利益を最小化し、利益を最大化する有効ながん検診の実践活動が広がることを期待したい。また今回の特集内容はあくまでも集団を対象とした対策型検診のエビデンスであり、個々を対象としたものではないことには十分注意する必要がある。